

はじめに

宗教文化研究所は、2012年度に新たなスタッフとして金承哲氏を迎え、研究休暇から戻ったスワンソン所員を含む所員一同により研究体制を一新した。同年度の活動のひとつの中心として、「南山大学国際化推進事業」の運営がある。同事業の第1期と第2期の移行期に当たり、前者に関しては、研究成果（P.L. スワンソン編『キリスト教聖霊運動とシャーマニズム』）が刊行された。後者については、「現代東アジアにおけるキリスト教の受容と展開」を主題として設定し、研究所内での研究集会に加えて、研究所員・研究員による韓国キリスト教関係施設への訪問調査を実施した。日本語版『所報』、英語版 Bulletin にはともに、このプロジェクトに関連した記事を掲載している。アジアにおけるキリスト教という研究課題は、当研究所のみならず、近年、国内のいくつかの研究グループにおいても取り組まれてきているので、この第2期の国際化推進事業については、そうした外部の研究グループとの連携も視野に入れ、充実を図っていききたい。

また日本語版『所報』には、かつて研究員として在籍された大谷栄一氏（佛教大学准教授）の近刊書をめぐる合評会の記録と、永岡崇研究員による「孝本貢文庫」に関する報告を掲載している。当研究所は、40年近くの歴史のなかで、時代時代における「若手」研究者を仲間として迎え入れ、研究所としての研究活動の活発化を図ってきた。そうした若手研究者たちの、研究所外におけるネットワークの拡大と充実の成果として、これらの論考の掲載に至っていることは、喜ばしく、また誇らしいことでもある。なお、明治大学で長く教鞭をとられた孝本貢先生が晩年に取り組まれた研究領域のひとつとして戦死者慰霊研究があり、当研究所の粟津賢太研究員も、関連する共同研究を通じて孝本先生の薫陶を受けたひとりである。「孝本貢文庫」は、粟津研究員の仲介により当研究所にご寄贈いただいた資料であり、詳細については永岡報告を参照されたい。なお、粟津研究員に加え、西村明・東京大学准教授と、奥山がフロリダ州立大学で開催された国際会議 World War II and Religion において発表した原稿は、英語版 Bulletin に掲載してある。

なお、私たちの大先輩でもあり、気さくで朗らかな同僚でもあったヤン・スィンゲドー先生が2012年11月に母国ベルギーで逝去された。諸先生方にお寄せいただいたスィンゲドー先生にまつわる思い出からは、改めて、スィンゲドー先生の人間味あふれる人柄が生き生きと浮かび上がってくる。私自身もパウルスハイムの同居人として、懐かしく楽しい思い出がいくつもあるが、先生の独特なユーモアを引き継ぐことはとてもできそうにない。彼はその存在自体に、自然と人を和ませるものをもっていったような気がする。南山宗教文化研究所の後輩としては、せめてその何分の一かのホスピタリティをもって、多くの来訪者を今後もお迎えしたいと願っている。

2012年5月17日

奥山 倫明